

早稲田大学野球部日本一達成の要因の分析

The analysis of factors for the all-Japan championship of Waseda University baseball club

1K04B147-1

辻 哲史

指導教員

主査 彼末一之先生

副査 土屋純先生

【序論】

今日の野球界において、試合でデータを活用することは勝敗を決める重要な要因となっている。投手の配球パターンや打者の得意コース、チームの攻め方など、データの種類は限り無いほど多い。そこでメジャーリーグや日本のプロ野球では、データ分析専門のスタッフやコンピュータを備えているチームがほとんどである。日本のプロ野球では、元ヤクルトスワローズ監督の野村克也監督（現東北楽天ゴールデンイーグルス監督）＝データ野球と称されてきたが、今やデータ野球は必要不可欠なものとなっている。データから野球を分析することで、試合に勝つために必要な要因が見えてくると考えられる。また、勝っているチームにはどんな特徴があるのかがわかるのではないだろうか。

そこで本研究では、2007年東京六大学野球春季リーグ戦を完全優勝（10勝1敗、勝ち点5）という形で優勝し、第56回全日本大学野球選手権大会で日本一を達成した早稲田大学野球部の強さの要因を、試合のデータから明らかにすることを目的とした。

【方法】

調査対象は2007年東京六大学野球春季リーグ戦の全32試合（早稲田大学11試合、明治大学10試合、慶応大学11試合、法政大学11試合、立教大学10試合、東京大学11試合）と、第56回全日本大学野球選手権大会での早稲田大学の全4試合。

調査方法は、各試合のスコアブックの記録からテーマ別に必要なデータを算出した。

調査内容としては、2007年東京六大学野球春季リーグ戦においては、守備面で各大学の①投手成績、②先発・救援投手成績比較、③イニング先頭打者対戦成績、④イニング別失点状況を、攻撃面で各大学の①野手成績、②無死一塁でのバント・ヒッティング比較、③イニング先頭打者成績、④イニング別得点状況を調査した。また第56回全日本大学野球選手権大会の早稲田大学の全4試合から、早稲田大学の戦い方の特徴を調査した。

【結果および考察】

東京六大学野球春季リーグ戦においては、投手は

失点を少なく抑え、与四死球が6大学で最も少なかったことが、防御率2.18という好成績につながったと考えられる。また先発投手、救援投手ともに防御率2点台という安定感が、他大学と比較して優れていた。さらに、失点につながる可能性が高いイニング先頭打者の被出塁率を最も低く抑え、失点率も最も低く抑えたことも、早稲田大学の優れた部分だと言えるだろう。試合運びに関しては、序盤（1回、2回、3回）、終盤（7回、8回、9回）の失点が少なかったため、うまく試合運びができていたと考えられる。

野手においては、チーム打率.299、レギュラーの打率.361と6大学で最も良く、盗塁数、四死球の数が最も多く、失策（エラー）が最も少なかったことが他大学と比較して優れていたと言える。また、無死一塁でヒッティングもしくはバントを行った場合、早稲田大学だけが平均得点が両方1点台で、無死一塁というチャンスをもっと生かしていたと考えられる。一番得点に結びつきやすいイニング先頭打者の成績では、早稲田大学が最も先頭打者を得点に結びつけており、他大学と比較しても優れていたことがわかった。また、早稲田大学は試合の序盤、中盤、終盤でバランスよく得点していたことがわかり、有利に試合を展開していくことができていた可能性が高いと考えられる。

第56回全日本大学野球選手権大会では、チーム打率.308で、1試合平均7点以上という得点があり、失策数は0、投手も防御率1.50という数字から、早稲田大学が優れていたことがわかった。さらに、リーグ戦では、11試合で29個（1試合平均2.63個）の犠打があった早稲田大学だが、大学野球選手権大会では、チームの犠打が4試合で15個もあり、1試合で約4個の犠打があったことになる。また、4番打者も犠打を行っていたことから、早稲田大学がつなぐ意識を持って戦っていたと考えられる。

試合において大事な「流れ」に関しては、早稲田大学は得点した直後は完璧に抑え、失点した直後は50%という率ですぐに点を取り返していたことから、試合の流れに関しても有利に戦うことができていた可能性が高いと考えられる。

以上のことが、早稲田大学野球部が日本一を達成することができた要因だと考えられる。